

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	大野 健一	学校名	埼玉県川口市立飯仲小学校 (兼務校の川口市立仲町小学校にて授業実践)
担当教科等	外国語・日本語指導	対象学年(人数)	4年生 (81名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 10月 ~ 11月 (3時間)		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：外国語、総合的な学習の時間		
2. 単元名と単元目標 単元名：母語について考えよう 単元目標：母語とは何かを考え、異なる母語(言語)を話す人たちへの理解を深めるとともに、普段一緒に生活をする友達との相互理解を深める。 関連する学習指導要領上の目標：探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。(総合)		
3. 単元の評価 規準	①知識・技能	- ALT やゲストティーチャー等が説明する他国の母語や文化について正しく理解している。 - 異なる言語や文化について、それぞれの違いに気づき、その多様性を理解しようとしている。
	②思考・判断・表現	- 母語や他の言語、その背景にある文化について疑問や好奇心を持ち、課題解決の見通しを持つことができる。 - 体験的に学んだり、調べたりしたことを基に、情報を整理・分析し、自分の意見を持つことができる。
	③主体的に学習に取り組む態度	- 異なる文化や言語に興味関心を高め、自分から質問をしたり、積極的に考えたりしようとしている。 - 自分自身の母語について考えたり、自ら進んで活動に参加しようとしていたりしている。 - 自分の母語ではない言語を使って、相手に分かりやすい自己紹介に取り組もうとしている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由および単元の意義】 本校の児童は、小さいころから、色々な国から来た友達がいる環境が当たり前の生活を送っている。クラスの半数近くが何らかの形で外国とつながりがあるのだが、それぞれがどのような母語(言語)を家で話しているのか、について互いに話す機会はほとんどない。違う言葉を話す、または、日本語が流暢ではない友達だが、日常生活ではそれほど困らない、程度に捉えている子供たちが多く見受けられる。しかし、互いの母語(言語)を知らないことや、それに関心を寄せないことは、その背景にある他国の文化への無関心とも言える状況である。実際に、このような状況が、トラブルの原因になり、特定の国の名前を出して非難をしたり、〇〇人だから、のようにステレオタイプ的に非難をしたりすることにつながる事例も実際に起こっている。	

本単元では、バングラデシュ独立のきっかけとなったデモの犠牲者を追悼する塔「ショヒド・ミナール」を導入に活用する。ショヒド・ミナールは、バングラデシュ人の母語であるベンガル語を守るために立ち上がり、パキスタンとの独立闘争で犠牲になった人々を弔う塔である。1時間目では、なぜ、バングラデシュの人々は母語を必死に守ろうとしたのかを考える。そして、そもそも母語とは何なのか、なぜ人々にとって大切なのかをALTの説話なども踏まえて考えていく。次に2時間目で、母語が突然奪われ、使えなくなるということはどのようなことなのかを、グループ活動を通じて体験的に学ぶ。最後は、友達の母語で自己紹介をし、母語の尊重やクラスの友達の多様性などを学ぶ活動を展開していきたい。

【児童観】

埼玉県川口市には外国人人口が約4万人おり、全人口の7.3%を占めている。これは全国的に見ても非常に高い数字である。本校の位置する西川口周辺は、市内の中でも外国籍の方が多く住んでいる地域にあたる。特に、学校周辺は中国人の集住地域となっており、学校にも多くの中国人児童が在籍している。しかし、近年はネパールやベトナムなど南アジアや東南アジアにルーツを持つ児童の数も増加している。（本校は、バングラデシュ出身の児童も2名在籍している。）

本校は、様々な文化・言語背景を持つ子ども達がクラスに混在している状況である。学校全体としてどの学年にも外国にルーツを持つ児童が多く、全校児童の4割は外国につながっている。転入してくる児童の多くが外国籍というのも大きな特徴である。今回授業を行う4年生も非常に多様であり、中国、韓国、ネパール、ベトナム、バングラデシュなど、学年全体の1/3以上が外国ルーツとなっている。

【指導観】

1時間目は、バングラデシュ独立の引き金ともなった、母語闘争、ショヒド・ミナールの学習を通して、なぜバングラデシュの人々は自分の命をかけてまで母語を守ろうとしたのかを考える。そして、自分の母語や母語の尊さを考える時間にしたい。この時間は様々な葛藤や状況が想定される。教える側は、非常にセンシティブな事例を扱っている、という意識も持たなくてはならない。例えばクラスには、親のどちらかが別の言語を話している場合や、国籍に関わらず、生まれ育った日本の日本語を母語と捉えているケースなどである。また、家庭内で複数の言語を使用しているので、母語を1つに決められない、というような児童もいる可能性がある。よって、それぞれの児童の状況に寄り添いながら、母語に優越はない、ということを強調しながら進めたいと考える。

本学年の子供たちは、様々な言語を母語とし、違った文化背景を持つ友達と共生して日々の生活を送っている。児童には、自分が何気なく生活をしている空間が、実は多様性に富んでいることに気づくとともに、それぞれの母語・文化を尊重することの大切さに気付かせたい。

5. 単元計画（全 3 時間）				
	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	母語とは何か？国際母語デーから考える	・自分の母語と友達の母語を知る ・母語の大切さを知る	・ショヒド・ミナールとバングラデシュの独立について ・国際母語デーについて ・自分の母語について	・フォトライニング ・ALT
2 本時	母語が使えなくなるとはどういうことか	・母語が奪われることを体験的に学ぶ	・前時の復習 ・同化政策とアイヌ語のこと ・グループワーク（母語が全く使えない状況で他言語を使って課題解決をする）	・フォトライニング ・パワーポイント ・ALT
3	異なる母語を話す友達の理解	・異なる母語を話す友達の理解	・自分の母語ではない言語で自己紹介をする。 ・母語話者と自己紹介文の練習	・ALT

6. 本時の展開（2 時間目）		
本時のねらい：母語が使えなくなる、とはどういうことなのかを知ろう。		
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	・前時の復習 (①ショヒド・ミナール ②国際母語デー ③自分の母語) ・バングラデシュ独立の時、母語は守られたが、 → もし母語が守られなかったとしたらどうなるのか？	・歴史的な詳しい説明はしないで事実のみ端的に伝える。 ・活動のルール説明 ① 使用言語は英語のみ ② ジェスチャーは OK ③ どうしても難しい場合は、挙手して教師を呼ぶ。許可を得てヘルプタイムを使うことができる（10 秒間）。日本語・中国語で説明 OK
展開 (25分)	・同化政策によって母語を奪われたアイヌの事例 ・グループ活動：自分たちの母語（この活動では日本語を想定）がある日突然使えなくなったら…。 ・各班で課題の絵を完成させる活動。5 人班の場合、4 人は説明、1 人は絵を描く。この活動を行う際は、 <u>すべて英語を使い、それ以外の言語は使用禁止。（8 分）</u> ・描き終えたら、実際の写真と自分たちが描いた絵を見比べてみる。 ・突然母語が使えなくなった体験を振り返る ◎ALT の説話（もし、母語であるビサヤ語が奪われたら） フィリピンはかつてスペイン、日本、アメリカなど様々な国	

まとめ (5分)	の植民地だった。	
7. 資料（教材） ・ フォトランゲージ（バングラデシュ滞在中の写真） ・ パワーポイント資料 ・ ALT の説話用ピクチャーカード4枚（英語、日本語、タガログ語、ビサヤ語） ・ 母語が使えない状況でのグループ活動時の絵＋B4 白紙用紙		
8. 評価規準に基づく本時の評価方法 ・ 主体的に取り組む態度：自分の母語ではない言語を使って、相手に分かりやすい自己紹介に取り組もうとしている。→ 母語ではない言語を使ってグループで絵を再現する活動 ・ 知識/技能：・ ALT が説明する他国の母語や文化について正しく理解している。→ ALT の説話		
9. 学校外との連携 ・ 外部講師（バングラデシュ人の知人にゲストティーチャーを依頼）		
10. 学びの軌跡（授業後の児童の感想から複数を選粋） ・ なぜ母語は大切なのか？について ① 昔から代々受け継がれてきた言葉だから ② 自分の家で話されている言葉（お母さんや家族から聞いて覚えた言葉 / 最初に使った言葉） ③ 自分の国の証だから ④ 日本語が無くなってしまったら、日本人ではなくなる ⑤ 大切にしないと、その言葉が無くなるから ⑥ その国の文化を残せるから ⑦ いつも家族や学校で使っていて、初めて知った大切な言葉 / 自分の出身地の言葉 ⑧ 小さなころから話してきた世界に1つしかない大切な言葉だから ⑨ 今まで日本語を使ってきた思い出があるから ・ 母語が使えなくなる、とはどういうことか？について（母語が使えない活動後に） ① 突然日本語が使えなくなると大変だな、と思った ② 相手に通じなくて不便だった ③ 母語が使えなくなることを体験してみて、（バングラデシュ）戦争にまでなった理由が分かった ④ どうやって相手に伝えればいいのか、分からなかった ⑤ 言いたいことがあるのに伝わらなかった（何て言えばいいか分からなかった） ⑥ 母語が使えなくなったら、伝えたいことがうまく伝わらなかったりして、母語がないと生きていけないと思いました		

⑦ 英語もあまり話せないのに、ずっと英語だけとか、中国語だけだったりすると、不便だし、生きていけなそう ⑧ 家族が家族でなくなってしまう ⑨ ジェスチャーを使って伝えようとしたけど、全部は伝わらなかった。 ◆日本語を母語と答えた児童数53人 それ以外の言語を母語と答えた児童数21人 (中国語、ネパール語、韓国・朝鮮語、ベンガル語)	
【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】	
11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	バングラデシュ滞在中「ショヒド・ミナール」を訪れる機会があった。私にとっては、運命の出会いともいえる場所になった。事前に資料で見ていた段階では、この場所に特に興味が沸いたという実感はなく、一つの訪問地でしかなかった。しかし、現地でショヒド・ミナールを訪れた時に、このモニュメントの設立に至った歴史的経緯を聞き、この場所がバングラデシュの人々にとっていかに大切であるかを知った。何より、母語であるベンガル語を守るために人々が立ち上がり、多くの人が命を落としたという事実が、自分自身にとって大きな衝撃であった。また、母語を守る闘争が後のバングラデシュ独立戦争、そして2月21日の国際母語デーを生んだ起点にもなっている、ということなど、ショヒド・ミナールを通して多くのことを学んだ。この経験から、普段当たり前に使っている母語について深く考えるようになった。母語とは人々にとってどのような存在なのか、母語を守ることにどのような意味があるのか、などを帰国後、児童たちに伝えたいと思うようになった。 地球上には約7000の言語が存在するという。しかし、グローバル化によって、英語のような大言語は拡大を続ける一方、少数民族の言語や、ある特定の地域でしか話されていないような小言語は消滅のスピードを加速させている。バングラデシュは、母語を守る戦いに勝利した国で、今でもバングラデシュの国の言語はベンガル語である。しかし、もし、バングラデシュが母語を守る戦いに勝利することができなかったらどうなっていただろうか。児童には、自分たちの母語はこれまでの先人たちが守り、大切に受け継いできたことや、その国の文化や生活と密接に関連していることなども伝えられたらと考えている。
12. 苦労した点	本授業で扱うテーマは、自分にとっての母語とは何か、母語消滅、絶滅危惧言語、また、母語を奪われる同化政策など内容が高度で難しく、抽象的である。よって、これらのテーマを小学校4年生児童にどこまで理解させることができるか不安であった。これらの題材が自分とは関係のない遠い話と捉えさせず、どれだけ「自分ごと」にできるかが大切と思い、彼らに身近なALTの説話を導入したり、アイヌの事例を扱ったりした。また、母語が奪われた状況を再現するため、母語を使わずに外国語のみを使って絵を仕上げるという活動を入れた。
13. 改善点	自分たちの母語を使わずにグループで絵を再現する活動は、児童の捉えでは母語が使えない不便さ、ばかりに目がいきがちであった。授業後の児童のワークシー

	トからも、「言いたいことが伝わらなくて大変だった」、「日本語が使えなくて不便だと思った」などの意見が多く見られた。これは、本授業のねらいとする、母語を奪われた時に人々がどう感じるか、ではなく、言語の利便性の問題にすり替わってしまう恐れがある。しかしながら、小学４年生の発達段階を考えれば、現時点で代替案が思いつく訳でもなく、今後の課題であると考えている。
14. 成果が出た点	①バングラデシュのショヒド・ミナールから、多くの学びにつながったこと。 ②児童たちの母語に対する意識の変容が見られたこと。 ③互いのルーツを知り、それぞれが話す言葉への尊重の気持ちが生まれたこと。
15. 自由記述	現勤務校は、全体の児童の実に４０％以上が外国につながっている。多くは中国の出身であるが、彼らの文化的、言語的なバックグラウンドは実に多様である。福建や四川など中国南方をルーツに持つ児童もいれば、大連や内モンゴル自治区など北部をルーツとしている児童もいる。彼らに自分の母語は何か、と聞くと中国語とは答えずに福建語と答えた児童が多かったことも興味深い。近年は、ネパールやバングラデシュ、ベトナムなど、アジアの広い範囲から児童が転入しており、それらの子供たちが学校という場で共生している様子は、近い将来の日本の縮図のような感じがしてならない。そのような環境で日々生活をしている子供たちだからこそ、母語やお互いの言語について考えることは、多文化を尊重する心の醸成につながるのではないかと考え、この授業を作っていた。大人の世界に目を向ければ、連日のように外国人抑制、強制送還などの言葉を耳にするようになった。今の日本の現状は、多文化共生社会とは真逆の、外国にルーツを持つ人々が住みにくい閉鎖的な社会に向かっていくような気がしてならない。そのような子供たちを取り巻く環境の変化、社会風潮へ一石を投じるような授業になったならば授業者として大変うれしく思う。 最後になるが、JICA 教師海外研修でバングラデシュに行っていなければ、このような深い学びには至らなかった。サポートしていただいたすべての関係者の皆様に感謝の意を表したい。訪問中、現地で病に倒れ、正直なところ苦しい研修ではあった。だが、それ以上に得たものは大きかったと実感している。私はこれまで、言語学習や言語そのものに興味を抱いてきたが、今回のバングラデシュ訪問は、私の言語観そのものを大きく揺さぶる経験となった。 今後のことであるが、本研修に行くことが決まってから学び始めたベンガル語は既に私のライフワークとなっている。これからも、ベンガル語の一学習者として長くバングラデシュおよび、ベンガル地域と付き合い続けたいと願う。また、今年度、私は２校で兼務しているので、両方の学校で本授業を実践し、より多くの子供と共有できたらと考えている。加えて、２月 21 日の国際母語デーに向け、母語のことをもっと考えられるような様々な取り組みを校内で行う準備をしているところである。